

## 特例子会社の設立・誘致で働く場づくり

～農園芸で越後の特産品を商品化し就農へ～

株式会社夢ガーデン、特定非営利活動法人UNE（新潟県）

山陽新聞社会事業団専務理事 阪本文雄



稲刈り



クロモジ採取



雪おろし



田植え



雪かき

(当ページの写真提供：特定非営利活動法人UNE)

### 取材先データ

#### 株式会社夢ガーデン

〒940-0241 新潟県長岡市北荷頃1517-2 TEL 0258-51-1150

2012（平成24）年1月に設立。肥料「かんとリースーパー緑水」を製造、出荷。木工品の製造、販売、野菜や山菜の生産、採取も行っている。社員数は11人（知的障害2人、精神障害2人、聴覚障害3人、その他身体障害1人、健常者3人）。代表取締役社長は野口邦夫氏。

親会社は緑水工業株式会社。新潟県内で上下水道施設の運転維持管理をコア事業とし、下水道管の清掃、調査、補修、更生工事、太陽光パネル洗浄作業、汚泥を肥料化するバイオマス事業などを展開している。社員数420人。代表取締役は家老俊一氏。

#### 特定非営利活動法人UNE

〒940-0242 新潟県長岡市一之貝869 TEL 0258-86-8121

長岡市議会議員だった家老洋氏が2011年4月に設立し、代表理事に就任。障害者、高齢者が人間らしく、誇りを持って自立することを支援するのが目的。モットーは「施しよりは仕事」。中山間地域で、農園芸による就労、特例子会社を誘致しての就労の場づくりに取り組む。



#### 編集委員から

越後の過疎地に山里の特性を活かして特産品を発掘し、くろもじ茶の製造、棚田で栽培した酒米を使ったどぶろく醸造、山菜を使った農家レストランの経営、民泊営業を展開している元気のよいNPO法人を訪ねた。この10年は試行錯誤の連続だったそうだが、特産品の商品化は着実に前進。むずかしい農園芸での就労に明かりが見えてきていた。過疎地への特例子会社の誘致、設立というユニークな取組みも成果をあげていた。



どぶろくづくり



Keyword：地域活性化、特例子会社、農福連携、農産品の製造・販売

写真：小山博孝・官野 貴

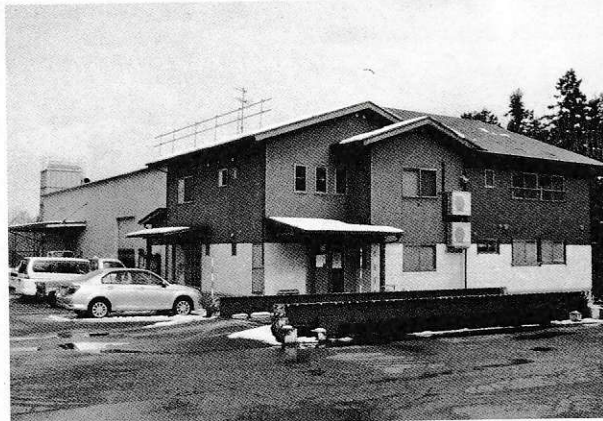


# POINT

- 1 障害者の就労の場として、特例子会社の設立・誘致に取り組む
- 2 中山間地域にある特産品を発掘し商品化。その生産・販売を地域活性化へつなぐ
- 3 障害者や受入れ市民のための「就農訓練カリキュラム」を作成、就農・就労をマニュアル化

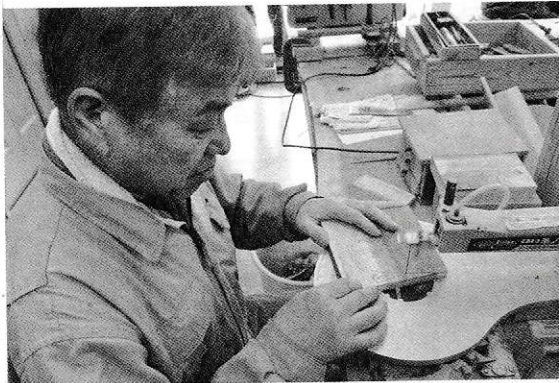


夢ガーデン代表取締役社長の野口邦夫さん



特例子会社「株式会社夢ガーデン」の社屋がある。

上越新幹線の長岡駅から車で20分、長いトンネルを抜けると、4月というのにまだ辺りの山には雪が残っていた。豪雪地帯なのだ。その里山の麓に緑水工業株式会社（以下、「緑水工業」）の「緑水工業コンポストセンター」の看板があり、下水処理の過程で発生する汚泥を高温発酵して肥料をつくるバイオマス事業所があった。その敷地内に鉄骨2階建ての、特例子会社「株式会社夢ガーデン」の社屋がある。



木製プランターを製作中の武藤哲夫さん



完成した木製プランター

「遠路ようこそ」と、作業服姿の代表取締役社長、野口邦夫さんが迎えてくれた。会社の概要を聞く。

「障害者の雇用機会の拡大、ノーマライゼーションを企業内で実現するため、ともに働くことの幸せを実感できる環境を目指して特例子会社を設立しました。ここで働く障害のある人たちの当初の業務は、肥料の袋詰めと配達でしたが、地域に高齢者が多く、耕作放棄地が増えたため、それを活用して農業に参入しました。ワラビや行者ニンニクなどの植えつけ、ウド、キノメ、ミズナ、ウワバミソウ、ネマガリタケなど山菜の採取、そして雪の降る冬は、木工製品の制作を行っています」

いっしょに郷土色豊かな、地域に根ざした仕事内容になっていた。「社員の体力、根気、特性、適性や、季節、働きやすさなどを配慮し、この7年間の経験により、業務内容はこのようになりました」と話す。

さつそく木工作業室へ。聴覚障害のある武藤哲夫さん（66歳）が杉の木を用い、草花を植えこむプランターをつくっていた。

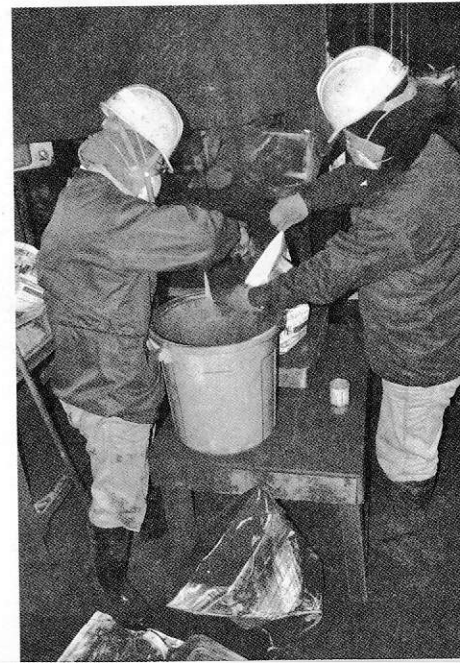
「木工が一番好きです。長岡聾学校にいたとき、大工コースで6年間習っていました。休みの日はスキーをします。スキー大会運営のボランティアにも行きます」

筆談と、同僚の手話を交えての取材。スキー歴は40年の上級者だった。

コンポストセンターで肥料の袋詰め作業を中心に働く小浦英幸さん（39歳）は「袋一つが15kg、結構重いんです。夏は暑くて汗が出ます。休みの日は彼女とドライブを楽しみます」と笑顔で話した。

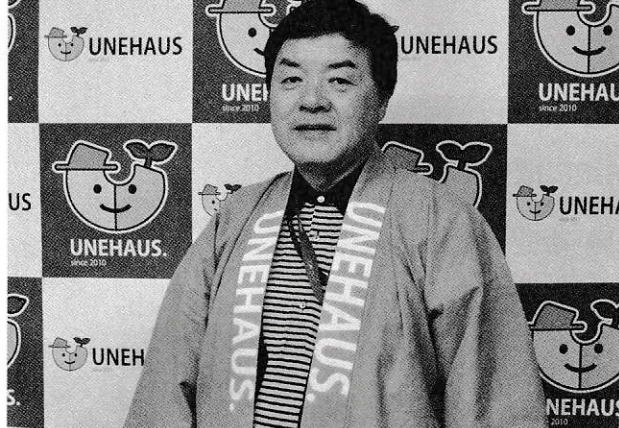
障害のある8人の年齢は21歳から68歳まで。平均年齢は30代だ。9時から16時まで勤務している。山菜と大根、白菜、スイカなどは長岡市街地にあるJA直売所で販売している。

「山菜、野菜の売り上げ、親会社からの肥料の生産委託費などが会社の収入源に



肥料の袋詰め作業をする小浦英幸さん（右）たち





UNE代表理事の家老洋さん



シイタケなどキノコの原木の整理をするスタッフ

なっています。発足時にはコミュニケーション不足からトラブルもありましたが、最近は落ち着きました。個性を把握することが大事です」と野口さんはいう。

実は、特例子会社設立を提案したのは「特定非営利活動法人UNE」(以下、「UNE」)代表理事の家老洋さんだった。

### 特例子会社設立のきっかけ

2004(平成16)年、中越地震が長岡市を襲った。山古志地区などは被害が大きく、全国へ報道された。当時、長岡市議会議員だった家老さんは被災者支援に東奔西走したが、自力で避難所に行けない障害者や介護の必要な高齢者が、救済物資も届かず、停電のため暖房もない自宅に取り残されている様子を目の当たりにした。このことがきっかけとなり、障害者が地域のなかで安心して暮らしているよう、2008年、信濃川の河川敷を



長岡市の山間地、一之貝地区

借りて障害者、その家族とともに畑を耕し野菜づくりを始め、2011年、市議会議員の任期切れとともにUNEを中山間地区にある長岡市一之貝に立ち上げた。その最初の仕事として取り組んだのが特例子会社の設立と誘致であった。

「過疎地に誘致すれば一気に障害者雇用は前進するし、地域活性化の拠点になる」と考え、緑水工業に働きかけた。ちょうど緑水工業も業務を拡張しようとしていたことなどから、特例子会社の設立は会社の方針として決定された。先進地の視察などを行い、「株式会社夢ガーデン」を設立登記した。その後、障害者就職面接会への参加、特例子会社としての認定と、2012年3月まで家老さんと緑水工業の担当者は走り続け、1年がかりで特例子会社発足へ漕ぎ着けた。県内で2番目、全国的には数少ない中小企業の特例子会社だった。

当時を振り返り、家老さんは、「就労を目ざす障害者にとって、『一般企業に就労する』という目標ができた。武藤さんはUNEで働いていましたが、当法人からの推薦で就職説明会に参加し採用されました」という。設立に際し、さまざまな助成制度があることを知り、活用した。「障害者雇用納付金制度に基づく助成金、トリアル雇用奨励金などの申請、障害者の受入れ後のジョブコーチ支援、生活支援

などを活用しました。また、新潟労働局、新潟県、長岡市、新潟障害者職業センター、障がい者就業・生活支援センターこしじ、ハローワーク、特別支援学校などとの連携が欠かせなかったし、お世話になりました」と感謝する。

家老さんは夢ガーデンの設立出資者の一人になり、いままUNEと連携しながら障害者や高齢者の就労に同一歩調で取り組んでいる。

2015年、夢ガーデンは地元の大光銀行から「地方創生大賞」を贈られた。障害者雇用、耕作放棄地の活用、山菜栽培の三つが過疎地の地域活性化へつながったことが評価された。

夢ガーデンの応接室には2017年、当機構から緑水工業へ贈られた、「障害者雇用優良事業所表彰」の「理事長努力賞」の表彰状が額に入れてあった。

緑水工業の社是である「何等報いらるるを期待しない献身的な努力」が実を結んだ、一つのあらわれである。

### 就労につながる特産品づくり

夢ガーデンから車で5分ほど、谷あいの傾斜地に水田、畑、農家が点在する一之貝地区に「UNEHAUS」というドイツ語表記の看板がかかる木造2階建ての民家がある。ここがUNEの本拠地、





棚田を見回る米づくり担当の田中大地さん



UNEHAUS (上) と農家レストラン (下)

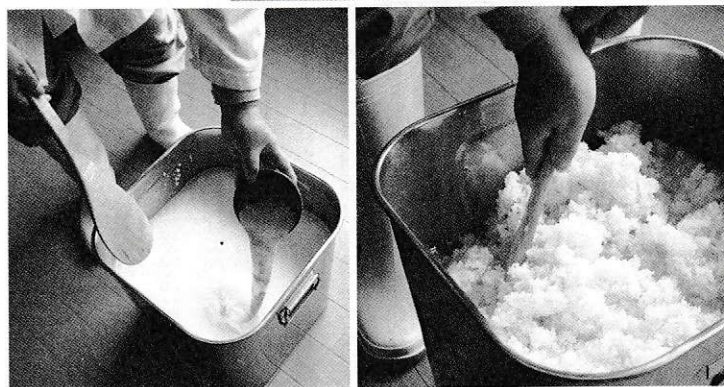
地域活動支援センター UNEHAUS である。U はユニバーサル、つまり「普遍的、全体」ということで、年齢、障害の有無に関係なく広くみんなに共通する、という意味を持つ。N は農園芸、E は越後を意味する。

「越後で農園芸を通して国も性別も年齢も障害の有無も超えてみんなが働き、自立する地域づくりを、という思いを三つのアルファベットに込めた」と家老さんは語る。

家老さんの実家は長岡市の米作農家である。1981(昭和56)年に宇都宮大学農学部を卒業し、1983年に農業実習生海外派遣事業でドイツ・ケンペンの野菜栽培農家にて、ジャガイモ、白菜づくりに1年間従事。ドイツ語で日常会話もこなせるようになった。帰国後は国際



どぶろくの仕込み作業をする齋藤喜一さん



農業者交流協会に勤務し、1991年から同協会欧州支部長としてドイツ・ボンに7年間駐在。海外派遣の農業実習生を受け入れ、世話をするコーディネーター役を果たした。帰国した1999年から2011年まで長岡市議会議員として農業振興、地域の活性化、国際交流などに尽力した。

家老さんが歩んだ人生から得た、国際性、越後にこだわる地域性、そこに根ざした農園芸、市議会議員の政治活動から知った障害者就労の必要性、そういったものがバックグラウンドになり UNE の活動が展開されている。法人設立から7年、地域の農園芸のなから就労につながる特産品づくりが具体化していた。

棚田を利用した米づくりは29歳のスタッフ、田中大地さんの担当。1.7ヘクタール、傾斜地にある28枚の棚田にイモチ病(※)への耐性のある改良されたコシヒカリ、従

来のコシヒカリ、酒米「亀の尾」、もち米「大正餅」、「農林22号」と、5種類のコメを生産している。5月初めに行う田植えでは、山の湧水を田に引く。これが最大の滋養となり、越後の風土と気温、日照がおいしい米に育ててくれる。9月から11月にかけて稲刈り。その間、あぜの草刈、病害虫の防除を、障害のあるスタッフとともにやっている。

実は田中さんは4年前までは食品会社のサラリーマンで、農業の経験はなかった。ハローワークの求人でも UNE を知り、自然が好きで趣味は山登りとあつて、UNE の活動に興味を持って転身、米づくりの先輩スタッフ、齋藤喜一さん(66歳)の実

※イモチ病：イネに発生する主要な病気の一つで、感染すると十分な成長ができなくなる

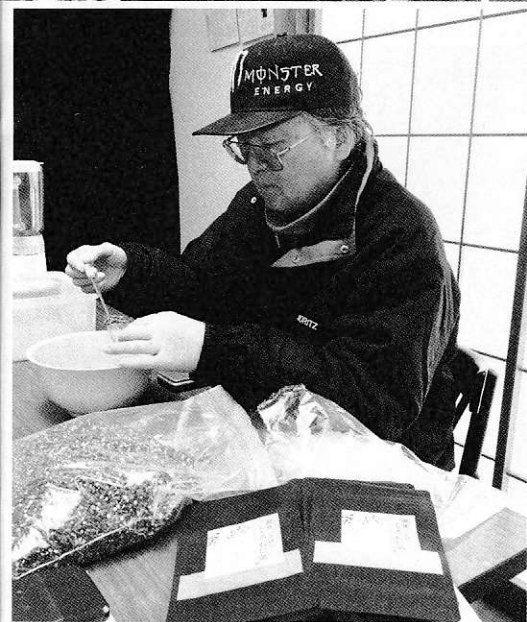




くろもじ工房では、クロモジからお茶やエッセシャルオイルがつけられる



瓶詰めされたどぶろく「雪中志乃界」



今年3月、地元紙長岡新聞に「全国どぶろく研究大会 雪中志乃界が優秀賞」、「市内初の蔵元 NPO法人UNE」という大きな見出しのトップ記事で紹介され、どぶろくの仕込みをする齋藤さんの写真も掲載された。記事には2013年、長岡市がどぶろく特区になり、UNEが

### どぶろくで優秀賞

地指導を受け、地域の農家の人たちに助けられて、米づくりを学んだ。「コメづくりが自分に合っている」と思いはじめ、3年目からやっと自分が思う米づくりができるようになりました」と田中さん。そのお米を使っているUNEHAS内の食堂が、長岡保健所の営業許可を取って農家レストランになり、「お客さんが『おいしい』といってくれるのが何よりうれしい。励みになります」と語る。

その他の醸造酒製造許可を長岡税務署から取得、同市内初の蔵元になり、齋藤さんが担当することになったと紹介されている。

齋藤さんのもと、地元の織物会社の研究開発担当の取締役だったが会社が倒産。職を失った人たちに申し訳ない気持ちがあり「福祉で恩返しを」とUNEに入った。半年後、どぶろくづくりの話が持ち上がり、翌年から酒米「亀の尾」を田植えした。どぶろくづくりには、自家産米を使う。亀の尾を蒸し、酵母と麴を入れ水と合わせ仕込む。亀の尾は寒さと水の冷たさに耐える特性があり、濃い芳醇な味に仕上がる。2015年11月、最初のどぶろくが瓶詰めされた。家老さんは新潟の銘酒にちなみ「雪中」、地名の一之貝から広く世界に思いを込め「志乃界」とし、ラベルに「雪中志乃界」と刷り込み、障害のあるスタッフとともにラベルを貼った。720mlで販売価格2160円。年間1000〜1500本売れている。「素人ががんばって国内2位の賞をいただいた。うれしかった。全国の人に飲んでほしい。採算ベースは2000本なので、もう少し。通信販売もしています」と66歳の齋藤さんの言葉に力が入った。

また、UNEではクロモジを使った商品の開発・販売にも力を入れている。2016年、家老さんは薬用酒メーカーの人

と知り合い「原料になるクロモジを探している」といわれた。クロモジは漢方では整腸作用があるとされ、香りがよく、リラックス効果も期待される。家老さんはUNEHASの周辺の山に自生していることを思い出し、現地へ行ってみると、棚田の上の山で発見。メーカーに連絡し納入への具体的な条件を確認して出荷が始まった。クロモジは高さ2mほどの落葉樹だ。秋口に山へ採取に行き、昨年度は3t出荷できた。その後、以前からの知り合いとの協働でお茶の商品化に取り組み、2017年より販売を開始した。枝と葉を採取、洗浄した後、乾燥し、お茶になる。枝をさみで短く切る作業は手間があるが、障害者には向いていた。山中でクロモジを見分ける作業も、覚えると早くなった。商品も好評で長岡市の道の駅、そしてJR長岡駅、新潟駅の土産物屋で販売している。商品化はさらに進み、今年3月には搾油を行い、そのエッセシャルオイルが「ピロミスト」という商品名でスプレーになった。寝る前、枕に吹きかけるとリラックス効果から睡眠導入が期待できるといふ。試してみたが、たしかによい香りだった。

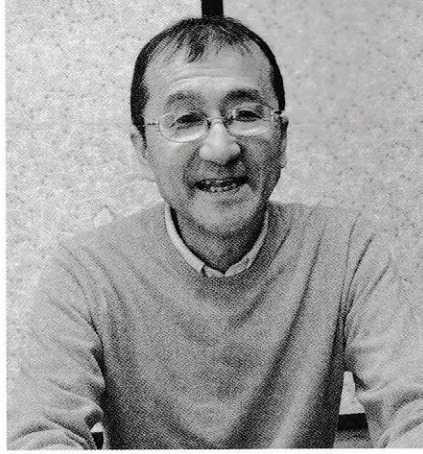
### 就農訓練カリキュラム

特産品づくりや農家レストランを営





料理担当の中野ケイ子さん



長岡市地域おこし協力隊の南博之さん



クロモジを使った「ピローミスト」と「くろもじ茶」

業する UNEHASU では、身体障害、精神障害のある方など10人が、パートタイマーやボランティアとして活動している。

米づくりからどぶろくづくりを行い、クロモジは薬用酒の原材料、お茶、ピローミストと展開。どぶろくはプロに負けない品質評価を得ることができ、クロモジは香りが商品力を発揮している。UNEHASUを訪れる人たちへの直接販売、長岡市のJA直売所、新潟県内の土産物屋での委託販売、通信販売をしているが、まだ広がりには欠けるといふ。「全国で売れる商品となる素地はあるのですが、知名度をあげるには宣伝など企業のノウハウと資金力が必要で、パートナーとの連携などでこの壁を超えたい」と家老さん。越後のNPO法人が発掘し育てた商品の全国展開へ意欲を見せる。

UNEHASUの活動が目ざされている点として、特例子会社誘致、特産品づくりのほか、就農訓練カリキュラムがある。就農訓練は市民ボランティア、障害者、生活困窮者ら、社会参加、就業、就農を目的とする人たちが、農園芸の基本的な知識と技能を習得し、地域社会で働き、生活する習慣を身につけることを目的としている。就農訓練カリキュラムに参加する人たちは、チェックリストにより、社会生活を営む基本的能力として、あいさつの励行な

ど15項目、就業に必要なこととして、報告や時間厳守など15項目を認識するようになっている。学科では土壌と肥料、病虫害防除、栽培計画、流通・販売などを学び、実技・実習では農機具の取扱い、施肥・播種、栽培を行う。このほか、稲刈り、地区の農業祭などにも参加。JA、農業改良普及センターなどから講師派遣を受けて、農家の人たちと一緒に作業をして話しながら教えてもらう。家老さんは「専門的、実践的な内容とし、立派な就農者を育成したい。農家の側から就農者へアプローチしようという数少ない試みです。農業の魅力、楽しさを体感し、自分に合った仕事だと思えるよう、詰め込み教育は避け、日程も余裕を持たせつつ、学んだことを振り返るなど、農業分野における働き方改革も一緒に考えたい」といふ。

### 特例子会社の誘致活動

夢ガーデンに続く特例子会社誘致も継続している。最近では「障害者雇用に特化した特例子会社企業誘致のご案内」というパンフレットを作成した。「障害者雇用の義務化」、「特例子会社の定義」、「長岡市の立地」を紹介し、受入れNPO法人として「UNEHASUの概要」を記載。特例子会社の運営プラン、農地の利用方法、障害者の募集方法などを盛りこみ、具体

的でわかりやすい内容とした。この1年間は京セラ株式会社、中国電力株式会社などを訪問し、長岡市での設立を働きかけた。

家老さんはUNEHASUと夢ガーデンを核にして北荷頃、一之貝、軽井沢の3地区にて農園芸で活性化する地域づくりをテーマに考え、北荷頃・一之貝・軽井沢集落連携促進協議会を組織し、事務局をUNEHASUに置いた。UNEHASUの活動に共感した、長岡市地域おこし協力隊の南博之さんは、UNEHASUに常駐して北荷頃地区の地域おこしに奔走する。「UNEHASUの活動が地域へ大きな輪になって広がっている」と南さんはいう。

これら、UNEHASUによる特例子会社の誘致活動などが、今後この地域の人口増や活性化の推進力になるよう期待している。

小山カメラマンとともに私たちはUNEHASUに泊まった。農家レストランのメニューは長岡市栃尾名物のジャンボ揚げ、車麩・ぜんまい・ふきのとうの煮つけ、山菜のてんぷら、れんこん・こんにゃくなどの入った「のっぺ」、白菜の漬物、大根キムチなどがお膳に並んだ。料理してくれたのは、近くに住むパートの中野ケイ子さん。孫8人、ひ孫6人、79歳の主婦が腕を振った越後の家庭料理。おいしかった。アルコール度12%のどぶろくの生もいけた。